

東北文教大学・東北文教大学短期大学部 図書館報

発行 東北文教大学・東北文教大学短期大学部附属図書館 〒990-2316 山形市片谷地515 ☎023-688-7544

目次

- つないで、つながる、文化の図書館…………… 1
- 私のおすすめ本…………… 3
- 平成30年度 図書館報告 …………… 4
- データベースを活用しよう…………… 4

つないで、つながる、文化の図書館

教授・附属図書館長 熊谷義隆

蚊はブン

館報の巻頭文だから高尚なことを書かなければと考えていたら、蚊に食われた。「ブーン」という音を聞いた時にすぐ反応すればよかったのだが、神妙な顔をしているうちに食われてしまった。パチリとわが身を叩いたのだが、その時はまた、「ブーン」と鳴いて、どこかに飛んで行ってしまった。まったくけしからんやつで、痒くて仕方がない。『枕草子』の「にくきもの」という章段に、眠たくて寝ている時に「力のほそ声にわびしげに名のりて、顔のほどに飛びありく」とあるくらいで、ほんとうにニクトラシイ！

と、そこではっと気づいた。『枕草子』に「力」とあるくらいだから、「力」は大和ことばで、漢字の「蚊」は「ブン」と音読みするのではあるまいか。最近改訂新版が出た『角川新字源』を引いたら、やはりそうだった。「蚊」は形声文字で、漢音は「ブン」、呉音が「モン」とある。

何のことだと思われる方もいらっしゃるかもしれないので、少し偉そうに解説を。漢字はもともと中国の文字が日本に入ってきたもの。その中国の発音を日本人が聞いて発音したのが「音読み」というものである。それに、本来の日本語の発音を当てはめたのが「訓読み」である。これを「蚊」に当てはめると、本来の日本語にニクトラシイ虫を「か」と呼ぶ音声があった。ただし、文字はなかった。そこに中国から「蚊」という文字が入って来て、「蚊」を「か」と当てはめ、訓読みにしたのである。「蚊」はあまり音読されることはなかったのだろう、最近はあまり見なくなったが、

寝ている時に蚊に食われないように布団の上から吊った「かや」と呼ぶ「蚊帳」もできたが、ブンチョウとは読まない。つまり、日常で音読み「ブン」はあまり使わない。だから、「蚊」は、「ブン」と音読みするのではないかと、やっと気づいた次第である。

なぜ、「蚊」を「ブン」と読むのか。「蚊」という漢字の中にある「文」の読みから、「ブン」と発音するのである。これも、何のことだと思われるかもしれない。漢字は文字全体で意味を表す表意文字で、目に見える具体的なものをかたどった象形文字から始まった。だが、漢字には四つの作り方と二つの活用法である「六書」がある。象形と指事という作り方で漢字が作られ、そしてそれらを組み合わせて、さらに漢字ができるのである。組み合わせ方に、意味と意味を合わせて作る会意という作り方と、意味を表す部分と発音を表す部分を組み合わせて作る形声という方法がある。そして、形声文字が漢字の約7割を占めるのだそう。蚊」も、その一つだったわけである。

「蚊」の場合、「虫」と「文」に分けられる。「虫」も「文」も、もともとは象形文字で、それぞれ意味と発音を持つ。その二つを組み合わせる時、一方は意味を表して発音を捨て、一方は発音だけを表して意味を捨てる。「虫」で昆虫の仲間の意味を表し、「文」で発音「ブン」を表し、それを組み合わせて「蚊」＝「ブン」と鳴く「虫」を表す表意文字になったわけだ。一文字全体で意味を表すが、意味を表す部分（意符）と発音を表す部分（音符）のつながりで出来ていたのである。

なお、「ブーン」と鳴いて来た蚊に食われたものだ

から「文」＝「ブン」と解したが、厳密に言えば「ブン」と発音したかどうかは、私には分からない。日本と中国は長いつながりがあるから、日本に入ってきた漢字の発音が、中国の時代と地域によって異なるのである。呉音・漢音・唐音（宋音）というのがそれで、「文」も呉音だと「モン」と読み、漢音だと「ブン」と読む。「文武」を「ブンブ」と読むが、「文部科学省」の「文部」を「ブンブ」とは読まず「モンブ」と読むようなものだ。「蚊」も漢音が「ブン」で、呉音が「モン」とあった。念のため別の辞書『学研新漢和大字典』を引いてみたら、「あるいは『もんもん』という羽音をまねた擬声語か」とある。古代の中国の蚊は、「モンモン」と鳴いていたのだろうか。現代の中国語の辞書を引いてみたら、蚊は「蚊子」で発音はwénzi（ウェンツ）で、文は「文章」wénzhāng（ウェンチャァン）とあり、「文」の部分は「ウェン」と発音するようである。

文化のつながり

言葉も文字も、もちろん文化の一つである。そして、「蚊」という一つの言葉にしても、何とそこにつながりがあることだろうか。「虫」と「文」のつながり、そして漢字の「蚊」と大和ことばの「か」のつながり。そして、「文」の読み方にも、呉音や漢音の歴史がある。このように、文化は独自性ととともに多くのつながりを持っているものなのだろう。蚊に食われたことから気づいた話で恐縮だが、このようなつながりを意識し、つないでいくことは大事だと思う。

中国から来た漢字のことを書いたが、普段使っている漢字の言葉には、西洋文化とのつながりを持つものが多い。翻訳語といわれるが、西洋文明を受容する時、外国語を漢字の語句に直したものである。例えば、「神経」や「盲腸」「十二指腸」。これは有名な『解体新書』で杉田玄白が訳した言葉だそうである。飛田良文氏『明治生まれの日本語』によると、西暦を導入するに際して「世紀」という言葉ができた。同書には他に「彼女」「印象」「恋愛」「家庭」「衛生」など、普段使っている言葉が紹介されている。「個人」「権利」「常識」「科学」「哲学」もそうである。

最近読んだ漢字検定協会・漢字文化研究所が発行した『幕末明治の翻訳語』に、加藤周一氏の文章が引用されていた。西周の翻訳語についてである。

西周の訳語を用いずに、現象を観察し、抽象し、概念を定義し、分類して、理性的な命題を合成することはできない。すなわち一般に哲学的な思考は不可能である。

加藤氏の原文は『日本近代思想体系15 翻訳の思想』に所収されている。さて、傍線部の語句（本文は傍点）が、翻訳語ということになる。これらの翻訳語には、以前からあった言葉の意味を変えて用いたものもあれば、新しく造語したものもあるが、これらの語句を使わないで日常生活を送ることはできないし、学生諸君にしたらレポートも書けないだろう。でも、普段使っ

ている言葉にも西洋とのつながりを持っているのである。そして、幕末明治には翻訳語として外国文化を受容したが、現代では外国語をそのまま使うようになった。テレビ、パソコン、カーナビなどなどである。

このように、言葉を例にとっても、日本の文化は外国文化を受け入れながら独自の様式を持っている。外国文化とのつながりがあるのである。さて、ここで大きな問題がある。「盲腸」や「十二指腸」そして「テレビ」や「パソコン」など、具体的なものはよいのだが、考え方や言葉の背景にある文化を理解するには、さらにつなげることが必要になる。

例えば引用した加藤周一氏の文章を、分かりやすく直すとすると、大変なことになる。

「捉えられ得るあらゆる事実」を「よく注意してくわしく見極め」、「具体的なものあるいは現象から、共通する側面・性質を抜き出して把握し」、「事物の本質的な特徴とそれらの連関」を「本質的属性を明らかにして限定し」・・・

辞書と首っ引きになりながら途中までやって、嫌になってしまった。つまり、外国の考え方や文化を背景に持つ抽象的な言葉を翻訳し、言葉として定着しても、その本来が持つ意味や内容まで理解しているか、ということそうでもないのである。柳父章氏『翻訳語成立事情』では、それを「カセット効果」と名付けている。「カセット」は何と小さな宝石箱が本来の意味だそう。そして、宝石箱の中身は分からなくても、人を魅惑し、大事なものと思ひ込む現象である。言葉に即せば、よく分からなくても使っている。そこで、つながりに気付くとともに本来の意味や内容とつなげることが大事になってくる。

文化と図書館

そのつながりに気付くとともに、それをさらにつなげるにはどうするか。それは、意識的に調べるということであろう。その調べ方にはいろいろある。情報機器の使用もちろん有効だろう。それとともに、図書館を使うことが何より有効だと思う。

実は、この文章を書くために、本学の図書館でいろいろ調べた。辞典や事典はもとより、『解体新書』にも一応当たってみた。日本思想体系の『洋学 下』に載っているし、その関連文献には東洋文庫に所載されているものもある。この東洋文庫というものの、あまり知られていないが、貴重な文献が収められている。そして、それらの文献を検索するのに、検索端末という情報機器がある。さらに、図書館に所蔵していなくてもデータベースを活用して関連する文献を探し、読むこともできる。調べながら、図書館というのは文化の集積している場所なのだとしみじみと思う。そして、それを活用することは意識的な行為であるとともに、それが可能な場所なのだと感じる。

文化はつながりを持っている。そのつながりをさらにつなげることのできるのが、図書館なのである。

図書館学生アルバイトの「私のおすすめ本」

清野 廣大 (子ども教育学科1年)

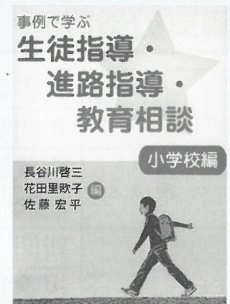
『事例で学ぶ 生徒指導・進路指導・教育相談 小学校編』

長谷川啓三 花田里欧子 佐藤宏平 編 遠見書房 2014.4 (375.2/ハセ 教育・保育書架)

事例によって現場の様々な経験に触れることができ、その解説によってとても理解しやすいことがこの本の魅力です。何がその子のつまずきの原因だったか、どうしてその支援が子どもの成長につながったかなどが考察されています。自身の考えと比較しながら読むといろんなことが得られて面白いです。

読み進めていくと本の内容と読者の考えをより深めるための「ワーク」があります。意見を共有しながら行うと支え方が広がっていきます。

この本は幼少連携・小中連携にも関連しています。小学校編ですが、子どもの支援に関心強い方にもおすすめです。また、シリーズで中学校・高等学校編もあり、中1ギャップなどについても書かれています。私が初めてこの本を読んだのが高校3年生の頃だったので、興味・関心があれば誰でも読みやすいと思います！おすすめです！



高橋 理奈 (子ども教育学科1年)

『ツバキ文具店』

小川糸 著 幻冬舎 2016.4 (913.6/オガ 1F 一般書架)

目の前にいない相手に自分の思いを伝えたいとき、皆さんはどのように伝えますか？多くの人は、スマホや携帯からメールやSNSなどを使って伝えると思います。しかし、ほんの少し前までは、大切な思いを伝えたいときには、自分の手で書いた手紙で伝えていました。手間はかかるものの、相手に素直な気持ちを伝えられると思いませんか？SNSでは、相手との認識の違いから言葉の捉え方に食い違いが起こり、伝えたいものも伝えることが出来なくなってしまいます。

この本は、スマホが普及し、SNSがコミュニケーションの主流となっている現代にとって、考えさせられるものがたくさん詰まっているように思います。私自身も友達や家族とのやり取りはSNSを使いますが、言葉選びは大切にしています。直筆ではなくとも、言葉ひとつで相手に自分の思いが素直に伝わるかが決まってくると思うので、この本を読んでからは気を付けるようにしています。

皆さんも、一度読んでみてはいかがでしょうか。



武田 果穂 (子ども教育学科1年)

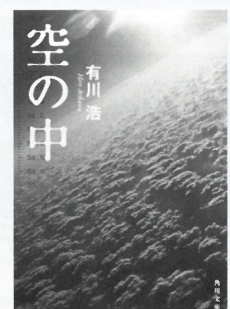
『空の中』

有川浩 著 角川文庫 2004.11 (913.6/アリ 1F 一般書架)

子どもの頃、空の上や雲の中には「何か」が存在するかもしれない、そんな想像をしたことはありませんでしたか？伝統的な言い伝えから理系的な答えまで、答えはたくさんありますが、そのひとつは「白鯨」です。

この作品は「自衛隊三部作」シリーズのひとつで、航空自衛隊が主役です。自衛隊、という少し硬く聞こえてしましますが、有川さんはあとがきで「怪獣物と青春物足しっばなして空自で和えてる」と言っています。まさしくその表現がぴったりで、いざ本を開いてみると空自パイロットと航空技術者、事故で父を失った少年と幼馴染の少女、そんな二組のペアを描きながら高度2万メートルの空には未確認飛行物体がいる。そんなめっちゃくちゃな設定が違和感なく溶け合ってなぜかさらっと読んでしまえる、不思議な心地よさを持つ一冊です。

「自衛隊三部作」シリーズや有川さんの他の作品も世界観に引き込まれる素敵なストーリーばかりなのでぜひ読んでみてください。



市川 萌李 (総合文化学科1年)

『日本人の知らない日本語シリーズ』

蛇蔵&海野風子 著 メディアファクトリー 2009.2 (810.4/ヘビ 1F 一般書架)

この本はコミックエッセイなので読書が苦手な人にもおすすめです。絵柄が可愛らしく、登場人物も特徴的で非常に読みやすいです。専門的なことではなく日本人が当たり前だと思っていて気が付かないようなことを分かりやすく、そして面白く説明してくれます。

また、日本語に関することだけではなく文化や慣習についても取り上げられています。読んでいると自分も間違っていた言葉や知らなかったこと、日本人として知っておきたいことなどが数多くありました。楽しく読みながら勉強にもなります。

2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催され、より多くの外国人が日本を訪れることになります。これからは英語が話せることは大事かもしれませんが、しかし、このような時だからこそ改めて日本の言葉や文化を見直してみてもいいのではないでしょうか？



上記の図書は図書館で所蔵しています。ぜひご利用ください。

平成30年度 図書館報告

資料の構成

(平成31年 3月31日現在)

1. 図 書	蔵書数	1 2 5, 1 9 0 冊
	年間受入冊数	9 6 5 冊
2. 雑 誌	所蔵雑誌種数	2 5 0 種 (和 2 0 6 種, 洋 4 4 種)
	年間受入雑誌種数	1 4 5 種 (和 1 3 5 種, 洋 1 0 種)
3. その他	新聞	1 7 種 (和 1 4 種, 洋 3 種)
	視聴覚資料	所蔵数 1, 2 4 7 点
	データベース	EBSCO Academic Search Elite, PsycINFO, 聞蔵, 河北新報データベース, 山形新聞記事データベース, magazineplus, CiNii Articles

利用状況

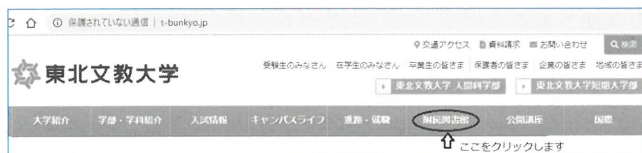
年間入館者数 (学生)	39, 611 人
学外者の年間入館者数	485 人
年間館外貸出冊数	4, 034 冊
開館日数	255 日



データベースを活用しよう

図書館では各種データベースを提供しています。データベースの種類によって得られる情報は様々。うまく使いこなして、レポート・課題・個人研究・卒業研究などに必要な文献を入手できます。わからないことは何でも図書館職員にお尋ねください。学内の端末から利用できるデータベースは、本学図書館の蔵書を調べるOPAC、国内の学会誌や大学等紀要に掲載された文献を検索するCiNii Articles、国外の国際誌を検索するEBSCO Academic Search Eliteがあります。他にも一般雑誌を検索するmagazineplus (マガジンプラス)、新聞記事は朝日新聞、河北新報、山形新聞の記事を検索して記事の閲覧ができます。

1. データベースへの入り方



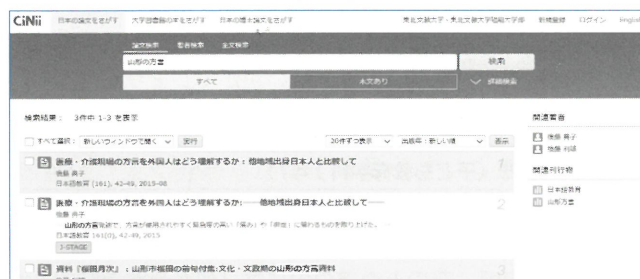
本学ホームページから図書館をクリックします。各種データベースや図書館情報へのリンクがあります。CiNiiとEBSCOを使ってみましょう。



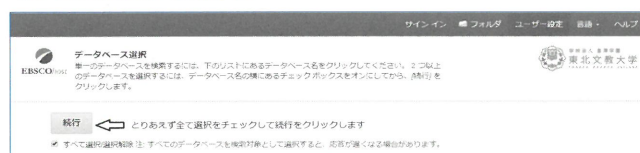
EBSCOは、図書館および学内のコンピュータ室の端末や研究室から使用できます (学外やWi-Fiからはライセンスの関係で使用できません)。学外からはGoogle Scholar (<https://scholar.google.co.jp/>) が便利です。

2. CiNiiを使う

CiNiiは図書館ページの右下にあります。



3. EBSCOを使う



最初にデータベースを指定します。わからない場合は全てにチェックをするといいでしょう。



CiNiiやEBSCOでは、論文本文がダウンロードして閲覧できるものも多いですが、論文の要約だけが公開され本文は有料の場合もあります。本文が入手できない論文や資料を学外の機関から複写を取り寄せることもできますので、図書館カウンターで申し込んでください (ただし、別途料金がかかります)。